

命のしるし(第三回)

小俣麦穂

〈前号のあらすじ〉

流れ者の傭兵シユルツとザツクは、納屋を貸してくれた農夫に先妻の子を修道院に連れて行ってくれと預かる。しかし、シユルツは少女に世界を見せるために遠回りしようとして決めていた。ザツクに言われ、シユルツは少女にエレという名をつける。ザツクは人並みの扱いを受けられなかった少女の世話を焼き、シユルツがつけた名前を教える。自分の過去を思い出しつつシユルツは、名前の由来、エメレットという妖精の詩をエレに聞かせるのだ。



絵 長浜めぐみ

3. しるし(穢れ)

顔に大きな赤痣のあるエレは、迷信深い辺境の小集落では特に忌諱される。できるだけそういつた集落は避けて進んだが、ならされた道を行くかぎり、人とはすれ違おう。傭兵と少女という奇妙な組み合わせを不審がった警邏に